

エロスの軌跡(2) : ハンス・ブリューアーとその周辺

福元, 圭太
九州大学言語文化部

<https://hdl.handle.net/2324/25936>

出版情報 : 独仏文学研究. 45, pp. 69-89, 1995-07-20. 九州大学独仏文学研究会
バージョン :
権利関係 :



エロスの軌跡(2)

— ハンス・ブリュアーとその周辺 —

福 元 圭 太

目次：2. はじめに

2-1. ハンス・ブリュアーの肖像

2-2. ヴァンダーフォーゲルとハンス・ブリュアー

2-3. ハンス・ブリュアーの周辺

(以下 次稿に続く)

2. はじめに

前稿¹⁾においては、トーマス・マンの『非政治的人間の考察』と、それに先行するいくつかのエッセーが取り上げられ、それらのテキストに如実に表れていたマンにおけるホモ・エローティッシュな要素、さらにそれに付随するアンティ・フェミニスティッシュな傾向が指摘された。ドイツの男性性文化 (Kultur)、軍国主義、保守主義、禁欲主義、プロテスタンティズム、ロマン主義、19世紀というキーワードでとらえるマンは、それらをフランス的な女性性、すなわち文明 (Zivilisation)、デモクラシー、急進主義、好色、カトリシズム、啓蒙主義、18および20世紀と対比させ、兄ハインリヒ・マンに代表される「文明の文学者」とのいわゆる「ヨーロッパの兄弟喧嘩」を始めたのであった。この「喧嘩」は「文化」対「文明」という対立図式で捉えられることが多かったが、ここでは「男性性」と「女性性」の——単純な二元論的対立ではなく——錯綜と捉えたい。「対立」とは同等なものの拮抗を表すが、ここで「錯綜」という語を用いたのは、この両者の間に、男性から女性への抑圧と、抑圧の原因となる女性への「恐怖」の裏返しとしての幻想、という込み入った関係があると考えられるからだ。歴史記述、時事論争、政治、戦争は、いまなお残念ながらそうであるように、男性が支配する領域であった。ましてや20世紀初頭の、プロイセン的な精神風土が濃厚なドイツでは、女性はこれらの領域からほぼ排除されていたと考えて間違いない。つま

り、「女性性」と称されるものは、実は男性が「これが女性だと思う（思いたい）ところのもの」にはかならない。女性という「他者」に対する恐怖ゆえの抑圧、そしてそこから魔女、ファム・ファタール、ヴァンプ、梅毒の媒介者、ヴァギナ・デンタータ、硬直したロゴスの最も恐れる「自然」を支配するカオスの極としての女性、といった一連の女性性という幻想／妄想が出来上がる²⁾。

このような男性の、女性に対する恐怖と敵愾心が誇大化した一方的な妄想は、とりわけ男性社会、男性共同体のなかで膨張していった。他者としての女性との間に良好な——「正常な」という言葉には権威主義的イデオロギーが付着しているのでここでは避けたい——関係を構築できない原因は、表面的には教育・政治制度やメディア支配の問題にあるだろう。しかしその背景に性的な問題、我々の文脈では特に女性を排除する男性間のホモ・エロティックという問題があることは見やすい構図である。女性蔑視、女性性の徴のもとに捉えられる結婚と家庭生活の蔑視は、軍隊をはじめとする男性共同体に特徴的な傾向であった。マンの『非政治的人間の考察』を注意深く読めば、マンにも同様の傾向があるということは前稿で指摘された。また1919年9月17日の日記はこう語っている。「私自身にとって疑いのないことだが、『考察』もまた私の性的な倒錯（Invertiertheit:「倒錯」とともに「同性愛」という意味もある）が表れたものである」³⁾。『非政治的人間の考察』を自らの性的倒錯の表れだとマンが述懐した契機は、ある本を読んだことであった。上に引用した日記の文章は、次の文章に続いているのだ。「夜にブリューアーを読む。一面的だが真実だ（Einseitig, aber wahr.）」⁴⁾。

おおよそ読書には二通りの快楽があるだろう。新しい知識が得られるという快楽。もう一つは、その書物のなかで自分のなかにすでにあるもの、自分が考えていたことに明確な輪郭が与えられているがゆえに、いわば自己を発見し再確認できるという快楽。「一面的だが、真実だ」という書き込みからは、マンがブリューアーから後者の快楽を引き出したことがわかる。ブリューアーはマンの内部にあったものの、すべてではないにせよ、「真実」の部分を雄弁に代弁しているといえる。

本稿とそれに続く稿の目的は、ハンス・ブリューアーがトーマス・マンに与えたインパクト、ないし、「読書の二つの快楽」という観点からいえば、ブリューアーによってマンが自らのなかに発見し、確認したものが何であったのかを明確にすることにある。

我々はしかし、かなりの遠回りをしなければならない。というのは、ハン

ス・ブリューアーとはいったいだれなのか、そしてハンス・ブリューアーはどのような時代のなかでその思想を形成したのか、そして、ここからは次稿以降で取り上げることとなるが、ブリューアーは何を書いているのかを論じることから始めなければならないからだ。

2-1. ハンス・ブリューアーの肖像⁵⁾

ヴァンダーフォーゲル会員番号33番という番号を14歳のときに与えられたハンス・ブリューアー (Hans Blüher) は、ごく初期からのヴァンダーフォーゲル構成員であり、またのちにはこの運動の理論家として広く知られることとなる。ブリューアーは1888年2月17日、シュレジエンのフライブルク (Freiburg in Schlesien) に、薬剤師の長男として生まれた。彼のほかにも何人か子供が生まれたが、みな夭折したらしく、ブリューアーは私の強い一人っ子として成長していく。ブリューアーはベルリンのやや南西、ポツダムにむかう鉄道路線沿いの新興住宅地、シュテグリッツ (Steglitz) のギムナジウムに通うことになる。このギムナジウムこそが、のちにヴァンダーフォーゲル運動の発祥の地となるのである (2-2.を参照)。ブリューアーは古典古代の語学・文学、音楽、体育といった科目はよくできたが、卒業試験での成績は「びり」で、成績順に入場する当時の卒業式の慣習では恥辱を味わうはずだった。しかし先生のお情けで、名前アルファベット順に入場することとなり、恥をかかずにすんだらしい。卒業後も定職に就かず、薬剤師という——マンならば「ちゃんとした市民的な (anständig und bürgerlich)」というだろうが——職業を営む両親をおおいに悩ませた。体質は虚弱で、あだ名は「影の薄い奴 (Gestalt)⁶⁾」。ストイックで陽気さに欠け、社交ダンスを嫌う硬派だった。虚弱体質を克服するため、夜中にバルコニーに出て体を鍛練したり、ローマに遠征したドイツ皇帝や、象でアルプスを越えたカルタゴの名将、ハンニバルの名を呪文のように唱えながら、イタリアへの徒歩旅行を敢行したりしたらしい⁷⁾。人と会うのはいつも夜の10時を過ぎてから、という夜型のブリューアーの家には、50センチメートルごとにビールとローソクが並べられ、ヴィルヘルム2世の大きな写真とルターの小さな絵が飾られたそこでの会合は、怪しげな「ヴァルブルギスの夜」の様相を呈したという。ブリューアーの著作は、下に詳しく取り上げるヴァンダーフォーゲルとその同性愛的傾向に関する問題といった領域のみならず、神学、医学、精神分析学、政治学、反ユダヤ主義、アンティ・フェミニズムなどにわたっている。特にフロイトに関してはドイツでもかなり早い時期に受容した一人だっ

たようで、フロイトとの間に書簡を交わしてもいる⁸⁾。ナチスの第三帝国ではブルーアーはアウトサイダーであり、自分の昔の反ユダヤ主義を反省していたらしい。晩年には、私はもう30年以上も前から青年運動に興味を持っていない、と述懐している。ブルーアーはトーマス・マンと同じ年の1955年、2月4日にベルリンで他界している。

ある思想家の思想内容と伝記的事実を安直に結びつけることは慎重に避けられてしかるべきだが、のちに見るように、ブルーアーがなぜヴァンダーフォーゲル運動のなかにホモ・エローティッシュな精神構造を見だし、それを賛美したのか、という問いを発するとき、当然のごとくブルーアー自らがホモ・エローティッシュな傾向を持っていたのではないか、という仮説がたてられよう。マルクス・ヴァーベルツォネック (Marcus Wawerzonnek) はブルーアーの同性愛擁護を、自らの同性愛的傾向の正統化とみるが、クレンケ (Kröhnke) やミルズ (Milles), キュンツラー (Künzler) などは、ブルーアーが同性愛者だったとは全く考えていない⁹⁾。このように研究者の間でもこの問題に対する意見は別れている。先行研究やブルーアー関係の一次資料を渉猟して1994年にウルフリート・ゴイター (Ulfried Geuter) は、ブルーアーを「ヘテロ・セクシュアルな同性愛のプロパガンディスト」と性格付けた¹⁰⁾。この一見矛盾した命名はブルーアー自身の矛盾に相応するものだ。ゴイターはブルーアーがルイーゼ (Luise 本名は Johanna Lappé) という女性を愛していたという伝記的事実をあげるが、同性愛的感情を告白していたことや「娼婦」を賛美する詩を作っていたことなどの、様々な性的遍歴を指摘してもいる。またブルーアーは第二次世界大戦後に結婚しているが、あまり幸福ではなかったこと、死の数週間前に書かれた最後の文章のタイトルがのちにふれるグスタフ・ヴィーネケン (2-2-3. を参照) に関するもので、「同性間の愛について」というタイトルだったことをあげている¹¹⁾。

トーマス・マンが描くブルーアーの肖像¹²⁾も、マンとブルーアーの関係を論ずる前に、あらかじめのぞいておこう。マンは1919年2月11日にミュンヘンのシュタイニケ書店で行なわれたブルーアーの講演会に出かけているが、書店主のシュタイニケが自分を演壇のまん前の第一列のまん中に座らせてくれたことを喜びながら、

すばらしい講演だった。ほとんど一言一句相違なく私の考えていることを語ってくれた。あとからこの若いドイツの民族の教師 (jung[er] deutsch[er]

Volkslehrer) (彼はこういったタイプの人間だ) にお礼を言えたのは実にうれしかった¹³⁾。

ブリュアーはその日「ドイツ帝国、ユダヤ性、社会主義」というテーマで話しをした。マンは、この講演のなかでブリュアーが「文明の文学者」という言い回しをすでに自家筆中のものとして使っている、と満悦しているようだ¹⁴⁾。これはいうまでもなく、ブリュアーがマンの『非政治的人間の考察』を熟読していたことを意味している。

2-2. ヴァンダーフォーゲルとハンス・ブリュアー

マルタ騎士団 (1070年頃設立)、テンペル騎士団 (1119年設立)、フリーメーソン (14世紀にはじめてスコットランドで言及される)、薔薇十字団 (1400年頃に設立されたと伝えられている)、イエズス会 (1534年設立)、19世紀からのブルシェンシャフトやコールといった学生組合、そして特にプロシアの軍隊...ドイツに伝統的に存在する男性結社ないし男性共同体は枚挙にいとまがない¹⁵⁾。そしてまた、世紀転換期に新たな男性共同体が産声をあげる。ヴァンダーフォーゲルの登場である。

ヴァンダーフォーゲルの前身となる徒歩旅行の運動は1986年に上記のベルリン郊外、シュテグリッツのギムナジウムから始まった。創始者はヘルマン・ホフマン (Hermann Hoffmann)。彼はこのギムナジウムの卒業生で、ベルリン大学で法学と東洋学を専攻しながら、ギムナジウムの後輩たちに、当時は新奇であった速記術を無償で教えていた。彼は以前マクデブルクにいたころから弟とよく徒歩旅行をしており、その経験談を聴いて興味を持ったシュテグリッツの後輩たちを渡り歩きに連れて行き始めたのが1896年、春のことである。やがてホフマンは1900年、コンスタンティノーブルに外交官として赴任し、シュテグリッツを離れている。

ホフマンのあとを継いだのは、カール・フィッシャー (Karl Fischer)。1881年に土地測量士の息子として生まれた。1901年の11月4日、フィッシャーの尽力でシュテグリッツのラーツケラーの奥に5人の若者と5人の大人が集まり、集会が持たれた。その場で機械工の見習いで、ギムナジウムの生徒ではなかったヴォルフ・マイネン (Wolf Meynen) の提案により、会の名称を「ヴァンダーフォーゲル」とすることが決定された。

フィッシャーはブリュアーに多大な影響を与えたカリスマ的指導者であった。彼は相手の話を全く聴かず、一方的にしゃべりまくる男だったらしく、

かなり独裁的なところがあった。後輩にスパルタ式の教育を施すフィッシャーは自らに対しても禁欲的だった¹⁶⁾。ブリュアーはこのような自分との心情の親近性ゆえにフィッシャーに引きつけられたのであろう。ただし、当然のごとく内部には厳格な指導者を嫌う反フィッシャー派もいた。その急先鋒がジークフリート・コパレ (Siegfried Copalle) であった。コパレは正当な理由もなくフィッシャー派のブリュアーをある渡り歩きに参加させなかったことがあったが、これがもとでフィッシャー、コパレ両派閥間のいさかいが大きくなり、1904年6月29日、ヴァンダーフォーゲルが正式に生まれた場所と同じシュテグリッツのラーツケラーの奥で、この運動は最初の分裂を迎えることになる。コパレ派はカリスマ的指導者をいただくのではなく、集団指導体制をとり、また渡り歩きだけでなく文化的な活動にも力をいれた。1902年には「ヴァンダーフォーゲル・オーケストラ」を組織している。

我々の関心にとって大切なのは、ブリュアーの『ヴァンダーフォーゲルある青年運動の歴史』(*Wandervogel. Geschichte einer Jugendbewegung*. 2 Bde. 1912)という重要な本が、この分裂後、フィッシャーを擁護するために書かれたということだ。ブリュアー23歳のこの本によって「青年運動(Jugendbewegung)」という呼称が一般的になったほど、版は重ねられた。1920年の段階で第1巻の「故郷と発端 (Heimat und Aufgang)」も、第2巻の「最盛期と終息 (Blüte und Niedergang)」も4版を重ねている¹⁷⁾。1922年には6版、そして現在でもブリュアーの書いたもののうちこの本だけは絶版になっておらず、ドイツの書籍目録に掲載されている。さらに同年の1912年、ブリュアーは当初はヴァンダーフォーゲル史の第3巻として計画されていた(2-3-2.を参照)『エロティックな現象としてのドイツ・ヴァンダーフォーゲル運動』(*Die Deutsche Wandervogelbewegung als erotisches Phänomen*)という本を出す。『新書評』(*Die neue Bücherschau*)ではこれら2冊(計3巻)の本を次のように評している。珍しい資料なので、提示しておきたい。

Man lasse sich von diesem leidenschaftlichen Denker durch den Statuensaal seiner Probleme führen, Fragen entlang, die glänzend und mit sicherer Hand gemeißelt sind, ohne letzte Ergriffenheit vielleicht, aber von kecker, überraschender Subjektivität im Finden des charakteristischen Umrisses. Erinnerungen an Nietzsche kommen¹⁸⁾.

「読者はこの情熱的な思想家によって、彼の問題圏の『彫刻の間』を導かれる思いがするであろう。読者が導かれていく問題は、見事に、確かな手で彫琢されており、おそらく最終的に本質を掴みきっているとはいえないにせよ、ことの性質の輪郭を描く際には、大胆で驚くべき主観性が発揮されている。ニーチェを彷彿とさせるものがある」

ヴァンダーフォーゲルの青年たちのうちで最も筆がたったといわれるブリュアーのこれらの本はしかし、ヴァンダーフォーゲルのメンバーや彼らをとる多くの人々からは、戸惑いと反感をもって受け入れられた。ウォルター・ラカーは、ブリュアーの提示したヴァンダーフォーゲル像は「ゆがんだ」ものであり、「これを修正するためにはほとんど50年ばかりかかった」¹⁹⁾とまで言っている。その原因は次の二つに集約できよう。すなわち、ブリュアーがヴァンダーフォーゲルをあまりに家庭と学校への反抗運動として描いたこと²⁰⁾、そしてこの青年運動に内在する同性愛の傾向をいわば暴露したこと、である。

まず第一点だが、ブリュアーの擁護するフィッシャー自身、ヴァンダーフォーゲルが家庭や学校に反抗的だというイメージを与えないよう、配慮していた。ヴァンダーフォーゲルが誕生した1901年11月4日の集会には5人の大人が参加していたことを想起してみよう。この5人のうち4人は自由業作家であり、残る一人は医師である²¹⁾。このようにフィッシャーはリベラルなインテリの大人を保証人として自分の陣営に引き込むことによって、運動の性格を穏健なものにしようと努力したのだ。実際のところ、シュテグリッツ・ギムナジウムの生徒たちは「反抗」を許容する精神的なゆとりのあるブルジョワ家庭の子弟が多く、ヴァンダーフォーゲルの運動も階級闘争とは異なる、おおそ精神的・内面的な運動だった。たしかにブルジョワ社会の側にある国家、教会、そして特にプロイセンのギムナジウムの堅物教授連に対する青年たちの反抗ではあった。トーマス・マンの『ブッデンブローック家の人々』のギムナジウムの場面(11部2章)やハインリヒ・マンの『ウンラート教授』を読めば、当時のギムナジウムの硬直した教育の様子がよくわかる。しかし、反抗する生徒たちもブルジョワ階級に属しているのであり、その意味ではブルジョワによるブルジョワ文化の批判、という性格のものであったといえよう。それゆえにヴァンダーフォーゲル期のドイツ青年運動は、まだ非政治的な段階にとどまっており、のちのち政治のなかに絡めとられていく各種の青年運動と混同せぬように注意せねばなるまい。

第二の問題点は、ブリューアーがヴァンダーフォーゲルの結集力、団結の強い絆はエローティク、しかもホモ・エローティクの作用と規定したことにある。ブルジョワ家庭の対局にあるのは、ブリューアーにとってはカリスマ的な男性の指導者に無償で奉仕するエロスの結社であるヴァンダーフォーゲルであった。時あたかも、1907年にマクシミリアン・ハルデンが皇帝ヴィルヘルム2世の側近、フィリップ・フォン・オイレンブルク侯爵に対し、同性愛の嫌疑で訴訟を起こしてから間もない頃で、世間がこの問題に対して神経質になっている時だった²²⁾。学校や親たちがブリューアーによる上のような性格規定に触発されて、ヴァンダーフォーゲルそのものに警戒心を抱いたのは自然ななりゆきだった。ヴァンダーフォーゲルの会員たちも戸惑っていた。同性愛的感情を持たないものにさえ、そういう「疑惑」が持たれたからである。

『性的中間段階のための年鑑』(*Jahrbuch für sexuelle Zwischenstufen*)にアルトゥール・ヴァイル (Arthur Weil) は、性的なものと罪の意識とをまだ分離していないヴァンダーフォーゲルの指導者たちの間で、ブリューアーの『エローティッシュな現象としてのドイツ・ヴァンダーフォーゲル運動』が「いかにすさまじい興奮を引き起こしたか」²³⁾を報告している。「社団法人ヴァンダーフォーゲル (Wandervogel e.V.)」という分派の指導を1913年から引き受けたエドゥムント・ノイエンドルフ (Edmund Neuendorff) などは、ブリューアーの2巻本のヴァンダーフォーゲル史はまだしも、第3巻目のエロスに関する本は「きわめて嫌悪すべきだ (in höchstem Grade widerwärtig)」²⁴⁾と述べる。また注目すべきは、ホモ・エローティッシュなものユダヤ性が同一視される民族主義的な傾向の書評が出ていることだ。『ヴァンダーフォーゲル指導者新聞』(*Wandervogelführerzeitung*) は、ヴァンダーフォーゲルへの少女とユダヤ人の参加に反対する保守的なフリードリヒ・ヴィルヘルム・フルダ (Friedrich Wilhelm Fulda) をその発行人としていたが、1913年の2月号にベッシュ (Boesch, K.) の「プロテスト」という記事を掲載した。この記事は2巻本のヴァンダーフォーゲル史に関する書評なのだがそこでは、ブリューアーはヴァンダーフォーゲルを「非ドイツ的なアナキズム」として描いている、男子青年の魂の清らかさ (Keuschheit) は「ドイツ的なものである」のに、ブリューアーはそれを見落としている、とされている。また、同じ号に掲載された記事でゲオルク・シュミット (Georg Schmitt) は「汝よ、このブリューアーという男はユダヤ人なのか」と問い、カール・ヴィルカー (Karl Wilker) は「ブリューアーの本は我々

にとって不健康な本だ。[……] ここにはゲルマン魂と他のある民族との闘いともいえるべきものがある」²⁵⁾、と書いている。

以上のように、ブリュアーのヴァンダーフォーゲル史、特に第3巻のエロスに関するモノグラフィーは、ごく一部に好意的に迎えられた²⁶⁾以外は、おおむね内部からの批判をまねくものだった。ラカーがブリュアーは「ゆがんだ」ヴァンダーフォーゲル像を提示した、という所以である。

シュテグリッツの町の本屋ではシュテグリッツ・ギムナジウムの校長の依頼で、当時悪魔の本と恐れられていたニーチェの本(『ツァラトゥストラかく語りき』1883年／『アンティ・クリスト』1888年など)とともにブリュアーのこれらの本も、店の奥へと並びかえられた。「社団法人ヴァンダーフォーゲル」派も1913年の2月、「このような本が[……]若い人々の手にとられることがないようにすることは自明のこと」である旨の回状(Rundbrief)を全学校長宛てに発信した。『ドイツ文献学誌』(*Deutsche Philologenblatt*)などは、ブリュアーの第3巻を、若者たちを「きわめて重大な道徳的危険にさらす毒の種子(Giftsaat)」とまで非難している²⁷⁾。ヴァンダーフォーゲル内部ではその後、ホモ・エローティッシュな傾向を持つものたちの追放劇が始まった。ブリュアー自身はこの動きを「追放の伝染病(Verfolgungsepidemie)」とよび、ヴィクトーア・エンゲルハルト(Viktor Engelhardt)はその追放の容赦のなさが「異端審問的手段で(mit inquisitorischen Mitteln)行なわれた」と伝えている²⁸⁾。

その性的な傾向に関する性格付与はさておき、精神的にヴァンダーフォーゲルを位置付けるならば、それは産業革命と科学文明によって寸断されて、失われつつあった共同体的感情を求め、理性の偏重によって反省的になった主客の分裂を「歩く」という身体行為のなかで架橋しようとする試みであり、自然に回帰し、生活を簡素化しようとする新しいルソー主義であり、キリスト教道徳を越えてゲルマン的なもの、異教的なもの、中世的なものを指向するロマン主義の回帰、すなわちネオ・ロマン主義の一つの表れであったことは確認されてよい。この運動が、カトリック教会による若年層からの共同体の組織化が進行していた南部ドイツ地域からではなく、近代化による孤独をより強く意識しがちな、北ドイツのプロテスタント地域、しかも自然が失われつつある大都市ベルリン近郊の新興住宅地で起こったのも、不思議ではない。ヴァンダーフォーゲルはなんらかの目的団体として特定のイデオロギーを追求するのではなく、禁酒、禁煙、節制を説き、リュックに鍋釜を積んで、

肩から掛けたギターを掻き鳴らし、民謡を口ずさなみながら²⁹⁾、中世の遍歴学生よろしく乾草のなかや農家の納屋で夜露をしのいだ、素朴で純粹といってもよい青年たちの自発的運動であった。ヴィルヘルム期ドイツの俗物文化や権威に対する一つのプロテストであったにせよ、この運動の本質は、きわめてドイツ的な、すなわち精神的で現実変革を第一義としない非政治的なものであったと規定することができよう。

2-3. ハンス・ブリュアーの周辺

ブリュアーがヴァンダーフォーゲルの初期に実権を握っていたカリスマ的指導者、カール・フィッシャーに心酔していたことは、上に述べた。ブリュアーはこの他にもさまざまな人物との交流があった。次稿で取り上げるトーマス・マンとブリュアーの関係をみる前に、ブリュアーをとりまく数人の人物にスポットをあててみる。

2-3-1. オイゲン・ディーディリヒス (Eugen Diedrichs; 1867-1930)

イエーナの出版人であるディーディリヒスは、いわゆる「保守革命」派にとっては非常に重要な存在だった³⁰⁾。また、マンが「一面的だが、真実だ」と評したブリュアーの本、『男性社会におけるエローティクの役割』を出版したのも、ネオ・ロマン主義を標榜し、ノヴァーリスやヘルダーリンの全集をてがけた、このディーディリヒスの出版社からだった。ディーディリヒスはイエーナにおいて、太陽信仰に基盤を持つゲルマン民族の古い祭りである「夏至祭 (Sonnenwendefeier)」³¹⁾を復活させようとしていた。そこに集まった若者たちから少女をも含めた青年運動の一派、「自由学生団」が1909年に生まれる。「兎庭園 (Hasegarten)」で古い輪舞やスウェーデンの民族舞踊を踊る彼らは、歌詞付きのステップダンスで「ゼラ (Sera)」という言葉のリフレインとして用いた。この若者たちを母胎にしてのちに「ゼラ・クライス (Sera Kreis)」という知識人のクライスが形成されるが、「ゼラ」の名はここに由来しているのだ³²⁾。ディーディリヒス自体、かなり奇矯なところがあつたらしく、バルカン地方の農民服を着、チロルの杖をもち、髪にきづたを巻いて荷馬車にのり、イエーナ市中をねり歩いたという³³⁾。「ゼラ・クライス」はのちに、ヴァンダーフォーゲルを代表とする非政治的な青年運動が「自由ドイツ青年」を中心とし、第一次世界大戦によって否応なく現実政治へと絡みとられていく転機となった、1913年10月11日、12日の「ホーエ・マイスナー大会」³⁴⁾へも参加することとなる。いずれにせよディーディリヒ

スが我々にとって関心を引くのは、「保守革命派」のこの大物出版人が、前キリスト教的なゲルマン信仰という、のちの国粹主義に傾斜していく宗教的なネオ・ロマン主義と、青年運動とを合流させ、さらにブリューアーを擁してそこにエロスに関する問題を投げかけた点にある。

2-3-2. マグヌス・ヒルシュフェルト (Magnus Hirschfeld; 1868-1935)

ヒルシュフェルトは性科学の権威として1918年、ベルリンに性科学研究所 (Institut für Sexualwissenschaft) を創設した人物である。彼は全般的な性の解放を主張し、産児制限や離婚の手続きの簡素化を推進させようとしたが、なかならずその活動の力点は、同性愛を禁止した1871年制定の刑法典第175条³⁵⁾の撤廃を求めることにあった。彼は「マグネシアおばさん」というあだ名で呼ばれていたらしいが³⁶⁾、「おばさん」を意味する Tante という語には軽蔑的なニュアンスの俗語で Tunte の意味、つまり、「挙動が女性的な男性同性愛者」、俗語でいえば「女っぽいおかま」という含みがあることは確かであろう。ブリューアーがヒルシュフェルトをベルリンに訪ねたとき、彼はビロードの肘掛け椅子の上であぐらをかいたままブリューアーに手を差し伸べた、という。ベルリンのヒルシュフェルトのもとには、女装趣味の男性や、半陰陽の人たちが足しげく出入りしていたようで、ブリューアーもとまどったらしい³⁷⁾。しかしこれは後年になってからブリューアーがかなり醜悪さを強調して描写したヒルシュフェルト像であって、二人の出会いと離反の経過はもっと複雑であった。

先にふれたように、ブリューアーは、当初ヴァンダーフォーゲル史の第3巻として出版する予定だった『エローティッシュな現象としてのドイツ・ヴァンダーフォーゲル運動』を1912年、単行本として、つまり前2巻と切り離して出版した。ゴイターによればその理由は、ブリューアーのこの本が、刑法184条 a、すなわち、16歳以下の青少年に「猥褻とはいえなくとも、その羞恥の感情を著しく侵害する」書物を販売することを禁ず³⁸⁾、という条項に抵触することをおそれたため、そして、ブリューアー自身この本の成功を確信しており、販売戦略として有利な方法を選択したため、この二つである。また、学問的な権威付けのために、ブリューアーはヒルシュフェルトその人にこの本の序文の執筆を依頼しているのだ。ブリューアーはさらにヒルシュフェルトの友人でベルリンの医者であったハインリヒ・ケルバー (Heinrich Koerber) を通じて、フロイトともコンタクトをとっている。ヒルシュフェルトは事実この本の初版では序文を書いているし、1912年の7月にブリュー

アーから原稿を受け取ったフロイトはブリューアーにあてて、出版社を探してみようという葉書を送っている。ブリューアーは特にフロイトの支持を得て、意を強くしたようだ³⁹⁾。

ではなぜ後年のような醜惡なヒルシュフェルト像が出来上がったのか。1912年4月30日の最初の出会いで印象はよく、ヒルシュフェルトが主催する「科学的博愛委員会 (Das wissenschaftlich-humanitäre Komitee)」には、ブリューアーも参加していたし、講演まで行なっていたにもかかわらず。ゴイターの詳述によれば⁴⁰⁾それは、ブリューアーの論文の一部をヒルシュフェルトが削除して、自分たちの雑誌『性的中間段階のための年鑑』に掲載したからだ、という。論文をいじられたことをながらく恨んでいたからこそ、後年 (1953の自伝『仕事と日々』(Werke und Tage)) でヒルシュフェルトをおとしめたのであろう。さらにゴイターは削除された部分まで検証する。その部分には、ヘテロ・セクシャルな人間がホモ・セクシャルな行為に及ぶ、すなわち「擬似同性愛 (Pseudohomosexualität)」的行為に及ぶのは、性的抑制が無くなった場合か、あるいは「劣った民族との混淆」、暴飲暴食ないし無為のために民族の質が低下した場合、というパッセージがあった。ユダヤ人であるヒルシュフェルトがこれに敏感に反応したのは当然であった。ユダヤ性と、蔑視される形態の同性愛 (ブリューアーにとって賛美の対象となる同性愛についてはのちに詳述する) とを関連づける民族主義がここにも表れている。ちなみに『エローティッシュな現象としてのドイツ・ヴァンダーフォーゲル運動』の第2版では、ヒルシュフェルトの序文は外されている。

ヒルシュフェルト、フロイトの同性愛理論とブリューアーのそれとの違いは、ブリューアーの『男性社会におけるエローティクの役割』を検討する際にふれることとなる。

2-3-3. グスタフ・ヴィーネケン (Gustav Wyneken; 1875-1964)

1900年から1906年まで、当時としては最も先進的な学校であったヘルマン・リーツ (Hermann Lietz) の「農村教育ハイム (Landerziehungsheim)」で教育学者として働いていたヴィーネケンには、その後チューリンゲンの森のなか、ヴィッカーズドルフに「自由学校共同体ヴィッカーズドルフ (Freie Schulgemeinde Wickersdorf)」を創設する。これはパウル・ゲヘーブ (Paul Geheeb) との共同作業になるもので、1906年のことであった。1910年、ヴィッカーズドルフを統括するマイニンゲン (Meiningen) の当局によって、市が徴収する教会税に抗議したことなどから悶着を起こし、ヴィーネケ

ンは更迭されるが、1919年には復帰する。1920年にはしかし、同性愛の嫌疑で、再び職を追われることとなった。ドイツ青年運動、特に「自由ドイツ青年」と上にふれた「ホーエ・マイスナー大会」にとって重要なこの人物について、スケッチしてみよう。

ヴィーネケンが青年運動にはたした最大の役割は、その「青年文化(Jugendkultur)」論の確立にあった。ブリューアーの1912年の本、『ヴァンダーフォーゲル ある青年運動の歴史』によって「青年運動」という言葉が一般化していったことは、上に述べたが、この「青年」という部分は、まさにヴィーネケンの「青年文化」論から自覚的な概念になっていった。ブリューアーがヴァンダーフォーゲルを「学校や両親への反抗運動」と規定した背景には、ヴィーネケンの思想にふれたことが影響していると考えられるのだ⁴¹⁾。また前述のディーディリヒスらの「ゼラ・クライス」もヴィーネケンの「自由学校共同体」を範としており、その影響力は絶大であったといえる。ヴィーネケンの思想はトーマス・マンも『非政治的人間の考察』でその家父長制的国家観を称揚しつつ引用したラガルト⁴²⁾、ラングベーン、それになんといってもニーチェの影響下にある。俗物(Philister)によって制度化された「教養」としての文化を否定し、真の文化を求めるニーチェ的ラディカリズムをヴィーネケンは指向し、その真の文化の担い手こそ青年であるべきだ、と主張する。ヴィッカーズドルフの学校では、ギリシャ・ラテン語の授業を必修科目からはずそうとした。ラカーの言うように、これらの「人文的教養」を堅持しようとしていたのは、真の「人文主義者」ではなく、権威主義的な俗物連中だったからだ⁴³⁾。またキリスト教はもはや信じられてもいないし、民衆の宗教でもないという理由から、もはや授業で教えなくてもよいとまで言っている。まさにニーチェ的な俗物の断罪、文献学的教養の軽蔑、キリスト教への挑戦であった。

1908年頃から準備されつつあった⁴⁴⁾雑誌『開始』(Anfang)はヴィーネケン派で固められていた。投稿者には匿名が多かったが、なかにはあのヴァルター・ベンヤミンも含まれている⁴⁵⁾。ギムナジウム時代からヴィーネケンに心酔し、1910年頃から『開始』に詩や散文を投稿し始めたベンヤミンは、のちにフライブルク大学で「自由学生団」結成に奔走する。この雑誌の影響で各地の大学やギムナジウムに、討論会や読書会、遠足などを組織する「談話室(Sprichsaal)」という制度が広まるが、ベンヤミンは1912年にこの「談話室」をベルリンで創設している⁴⁶⁾。第一次世界大戦の勃発後、ヴィーネケンの戦争を許容する発言を聞いてベンヤミンは、愛惜に満ちた決別の手

紙を、師にあてて1915年3月9日にしたためている⁴⁷⁾。

以上のように「青年」に文化史的な位置価値を与えたヴィーネケンが「失脚」するのは、またしても同性愛事件であった。1920年のことである。「またしても」というのは、さかのぼって1907年には、先にふれたマクシミリアン・ハルデンが皇帝の側近たちを同性愛の嫌疑で告訴したハルデン訴訟が、1910年には「古ヴァンダーフォーゲル (Alt-Wandervogel)」の分裂にまでいたる、やはり同性愛に関する事件、いわゆる「ヤンセン事件」(嫌疑をかけられ指導者としての地位を奪われた当事者が Wilhelm Jansen という名であった) がこれに続く。

ブリューアーを軸に、世紀転換期からマンの『非政治的人間の考察』、そして『魔の山』にいたる約25年の間の「同性愛のディスクール」を検証する作業は、さらに続けられねばならない。ヴァンダーフォーゲルのメンバーたちの愛読書⁴⁸⁾であった『トニオ・クレーガー』や『ヴェニスに死す』にも目配りが必要になるであろう。またブリューアーの理論とヒルシュフェルト、フロイトの理論との相違点などを指摘する課題も残されている。

(続)

註

引用文献に関しては、註においてはなるべく簡略に記し、筆者名と、場合によっては発行年、そしてページ数などをあげた。詳しくは参考文献一覧を参照されたし。

- 1) 拙稿：「エロスの軌跡(1)——トーマス・マン、ホモ・エローティック、政治——」。『独仏文学研究』第44号。九大独仏文学研究会, 1994. S. 29-53.
- 2) このあたりの事情を包括的に論じた書物としては、多くの「魔女論」があげられるが、筆者が大きなヒントと刺激を受けたのは、次の書物である、ニコラウス・ゾンバルト（田村和彦訳）『男性同盟と母権制神話——カール・シュミットとドイツの運命』。
- 3) ハンス・ヴィスキルヒェン（Hans Wißkirchen）は4)にあげた箇所の日記の文章で auch の部分を別様に解釈している。すなわち『非政治的人間の考察』が保守的でロマン主義的な政治思想でもありまた性的な倒錯の表出でもあるととっている（Wißkirchen, S.24.）。しかし次に挙げる原文からは、「ブリューアーの著作と同様、私の『考察』もまた」としか解釈できないのではないだろうか。

Las abends Blüher. Einseitig, aber wahr. Es unterliegt für mich selbst keinem Zweifel, daß »auch« die »Betrachtungen« ein Ausdruck meiner sexuellen Invertiertheit sind. (Siehe Anm.4))

- 4) Mann, Thomas: *Tagebücher 1918-1921*. S.303.
- 5) 先行研究としてきわめて質が高く、記述も生き生きとした八田恭昌の仕事（八田, 1981, 1986）をおおいに参考にさせていただいたが、上山安敏の論（上山, 1994）やウォルター・ラカーの記述等も参考にした。
- 6) ウォルター・ラカーの訳者は Gestalt を「ずうたい」と訳しているが、（ラカー, S.73）虚弱でやせぎすのブリューアーを考えれば、八田の訳（八田, 1986, S.107.）, 「幽霊」のほうがより適切だろう、ここでは「影の薄い奴」とした。
- 7) 虚弱の裏返しとしての人工的な肉体鍛練に八田は（八田, 1986, S.107.）ブリューアーは三島由紀夫のドイツ版だ、という絶妙の比較を用いてい

るが、我が意を得たりという感を持った。同性愛的傾向、皇帝（＝天皇）をカリスマの指導者と仰ぐ男性結社としての軍隊賛美といった要素は二人に共通して認められる。

- 8) 2-3-2. のヒルシュフェルトに関する記述を参照。
- 9) Vgl. Geuter, S.74.
- 10) ebd., S.74.
- 11) ebd., S.77.
- 12) マンとブリュアーのコンタクトについては Kurzke, S.177f. を参照。
- 13) Mann, Thomas: *Tagebücher 1918-1921*. S.148.
- 14) ebd., S.148. 「文明の文学者」は "Civilisationsliterat" と綴られている。
- 15) ブリュアーもこれらの結社・共同体について、その著書『男性社会におけるエーティクの役割』第2巻で論じている。また、新しい指摘ではないが (Kurzke, S.178), マンの『魔の山』における主要な登場人物がいずれもこれら男性結社に属していたことは単なる偶然ではかたづけられまい。すなわちゼッテムプリーニはフリーメーソンの会員、ナフタはイエズズ会士、ヨアヒムは軍人で、ベーレンスは学生組合のコール出身なのだ。この興味ある問題はしかし、『魔の山』という作品を分析する際に、論じられるであろう。
- 16) フィッシャーはその後、第一次世界大戦のおり、青島で日本軍の捕虜になっている。戦後は金持ちの家の床磨きや、ヴァンゼーの畔で新聞売りまでするほど経済的に困窮する。また、ナチス時代は「青年運動の功労者」ということで、「ヒトラー青年団」から送金を受けていた。現在でもベルリンにカール・フィッシャー協会がある (Vgl. ラカー, S.41; 八田, 1986, S.106)。
- 17) 田村 (S.143) は1920年には5版に達したとしているが、手元の資料 (Blüher, 1920, S.83.) ではまだ4版であった。もしかすると同年中に版を重ねたのかもしれない。
- 18) Blüher, 1920, S.83.
- 19) ラカー, S.74.
- 20) ブリュアーがヴァンダーフォーゲル運動を学校と家庭への反抗運動と捉えたのは、ブリュアーが大学に入ってからグスタフ・ヴィーネケンの学校改革運動にふれたからだ、という指摘がある (上山, 1994, S.61.) が、これについては2-3-3.を参照。

- 21) 大人の参加者として、郷土作家のゾーンライ、キルヒバッハなどと一人の医者が挙げられる(田村, S.144.; 上山, 1994, S.58)。
- 22) Vgl. Geuter, S.44ff.
- 23) ebd., S.94. zit. bei Geuter.
- 24) ebd., S.94. zit. bei Geuter.
- 25) ebd., S.95. zit. bei Geuter.
- 26) ebd., S.96f.
- 27) ebd., S.99.
- 28) ebd., S.100.
- 29) ハンス・ブロイアー (Hans Breuer) (ブリューアーとは別人である) が15世紀から18世紀の俗謡を収集して編集したヴァンダーフォーゲルの歌集、『ギターのハンス』(*Zupfgeigenhansl*; 1908年)は、爆発的に売れ、1933年までに100万部を越えた。なお上山(1994, S.120)は編者をブリューアーとしているが、ブロイアーが正しい。またこの歌集を1909年刊行としているが、Mohler (2.Teil, Ergänzungsband S.66)に従って1908年とした。
- 30) Vgl. Mohler, S.215.
- 31) 尾高豊作という学者が昭和7年(1932年)に、北ドイツ、マルク地方の「夏至祭」に関して興味ある報告をしている。祭りの様子を彷彿とさせる描写なので、引いておきたい。

松の木の茂った小高い丘、その上に暗い闇夜の空高く、盛んに燃えさかる
 焰が揚がっている。焰の回りには、二十人ばかりの若い男女が、楽しさう
 に唄をうたひ踊りをおどる。[……] 異邦の私共は、まことに奇異の感に
 打たれた。やがて焰が衰へると、一人の若者が列から離れて火に近づいて
 行く。続いて一人の乙女がその後に従ひ、二人は手を取り合つて立止まつ
 た。少時らく天を仰いで何か考へて居る風であつたが、彼等は口々に何事
 かを唱へると、一散に駆け出して焰の上を跳び越える。その時彼等の顔は
 真面目に引緊つてゐた。続いて後から後から、一組みづゝの男女が同様の
 ことを繰返し、総べてが終ると、後には消え残つた燃屑のみが赤々となつ
 てゐた。

(旧漢字は改めたが仮名遣いに関してはそのままである) 尾高豊作：
 『独逸の新教育運動』郷土教育連盟刊行、刀江書院、東京、昭和7年

(1932年)。S.14f.

- 32) 「ゼラ・クライス」に関しては小川哲哉の論文を参考にした。また、ディーディリヒスは、いずれ我々の視野に入ってこざるを得ないルートヴィヒ・クラゲス (Ludwig Klages), オズヴァルト・シュペングラー (Oswald Spengler) らとともに、ヘッケル (Ernst Haeckel) の「一元論 (Monismus)」の信奉者であった。新旧両教会を問わず、キリスト教が目の仇にしていたダーウィニズム的一元論についても小川の論文は参考になる。

- 33) Vgl. 八田, 1986, S.108f.

- 34) これについては田村, S.150ff. に詳しい。

- 35) 刑法175条の原文は以下の通り。

Die widernatürliche Unzucht, welche zwischen Personen männlichen Geschlechts oder von Menschen mit Tieren begangen wird, ist mit Gefängnis zu bestrafen; auch kann auf Verlust der bürgerlichen Ehrenrechte erkannt werden. (zit. bei Böhm, S.101)

「男子相互間ないし人類と畜類との間に行なわれる自然に反した猥褻行為は禁固刑に処される。また公民権の剥脱を宣することもありうる」

- 36) Vgl. 八田, 1986, S.109.

- 37) ebd., S.109.

- 38) Vgl. Geuter, S.79.

- 39) Vgl. ebd., S.80f.

- 40) Vgl. ebd., S.112ff.

- 41) キリスト教を批判するニーチェをいただき、ヘッケルの一元論に属するヴィーネケンは、当然教会からはいらまれていた。ヴィーネケンらがローマから圧力をかけられ、その他の学者がカトリック系の大学から追放されたとき、自分の出版社の雑誌『行為』(Tat) で一元論擁護のキャンペーンをはったのがディーディリヒスである。註20参照。

- 42) Vgl. Mann, Thomas: *Gesammelte Werke*, Bd.12, S.281.

- 43) Vgl. ラカー, S.79.

- 44) 上山 (1994, S.116) は『開始』の創刊を1912年5月、田村 (S.167) は1913年5月としているが、ここでは Mohler (S.298f.) の記述に従った。それによると、*„Der Anfang. Zeitschrift für kommende Kunst und Literatur“*. (Georges Barbizon u. Fritz Schoengarth, 1908-1910) ab Januar 1911, *„Der Anfang. Vereinigte Zeitschrift der Jugend“*. (Gustav

Wyneken) とあり、ヴィーネケンを代表者にしたのは、1911年1月からとなる。

- 45) ただしベンヤミンは Ardor というペンネームで投稿している。Vgl. Geuter, S.64.
- 46) Vgl. Benjamin, Walter: *Berliner Chronik*. In: *Gesammelte Schriften*. IV. S.467ff. (邦訳: 『ベンヤミン著作集12』所収, 「ペルリン年代記」晶文社, 東京, 1971)
- 47) ベンヤミン: 『書簡集I』, S.67f.
- 48) Vgl. Geuter, S.126ff.

文献一覧

ドイツ語文献

- Benjamin, Walter: *Gesammelte Schriften*. Surkamp, Frankfurt a.M., 1985.
- Böhm, Karl Werner: *Zwischen Selbstzucht und Verlangen. Thomas Mann und das Stigma Homosexualität*. Königshausen & Neumann, Würzburg, 1991.
- Blüher, Hans: *Die Rolle der Erotik in der männlichen Gesellschaft. Eine Theorie der menschlichen Staatsbildung nach Wesen und Wert*. I. Band. Eugen Diedirichs, Jena, 1917 (1919; sechstes bis zehntes Tausend)/ II. Band. Eugen Diedirichs, Jena, 1919.
- : *Die Nachfolge Platons. Eine Akademische Sache*. Anthropos Verlag, Prien, 1920.
- Geuter, Ulfried: *Homosexualität in der deutschen Jugendbewegung. Jugendfreundschaft und Sexualität im Diskurs von Jugendbewegung, Psychoanalyse und Jugendpsychologie am Beginn des 20. Jahrhunderts*. surkamp taschenbuch wissenschaft (stw 1113), Frankfurt a. M., 1994.
- Koopmann, Helmut (Hrsg.): *Thomas-Mann-Handbuch*. Kröner, Stuttgart, 1990.
- Kurzke, Hermann: *Thomas Mann. Epoche-Werke-Wirkung*. C.H.Beck, München, 1991. (2. überarbeitete Auflage)

- Mann, Thomas: *Gesammelte Werke in dreizehn Bänden*. Fischer Taschenbuch Verlag, Frankfurt a. M., 1990.
- : *Tagebücher 1918-1921*. Fischer, Frankfurt a. M., 1979.
- Mohler, Armin: *Die Konservative Revolution in Deutschland. 1918-1932. Ein Handbuch*. Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt, 1994. (4. Auflage)
- Widdig, Bernd: *Männerbünde und Massen. Zur Krise männlicher Identität in der Literatur der Moderne*. Westdeutscher Verlag, Oplden, 1992.
- Wißkirchen, Hans: Republikanischer Eros. Zu Walt Whitmans und Hans Blüchers Rolle in der politischen Publizistik Thomas Manns. In: *Heimsuchung und süßes Gift. Erotik und Poetik bei Thomas Mann*. Hrsg. von Gerhard Härle, Fischer Taschenbuch Verlag, Frankfurt a. M., 1992.

日本語文献

- 上山安敏：『神話と科学』岩波，東京，1984。
- ：『世紀末ドイツの若者』講談社学術文庫，東京，1994。
- 大石紀一郎（他編）：『ニーチェ事典』弘文堂，東京，1995。
- 小川哲哉：「セラ・クライス(Sera Kreis)に関する研究——20世紀初頭ドイツの知識人集団の一特質——」九州産業大学教養部紀要第28巻第1号所収，S.1～18。
- 尾高豊作：『独逸の新教育運動』郷土教育連盟刊行，刀江書院，東京，昭和7年(1932)。
- 立澤 剛：「青年運動——独逸の青年運動に就いて——」『岩波講座教育科学』第八冊所収，東京，昭和7年(1932)。
- 田村栄子：「『青年の国』への願いとその屈折」望田幸男・田村栄子著『ハーケンクロイツに生きる若きエリートたち——青年・学校・ナチズム』所収，有斐閣，東京，1990。
- 野村 修：『ベンヤミンの生涯』平凡社，東京，1993。
- 八田恭昌：『ヴァイマルの反逆者たち』世界思想社，京都，1981。
- ：『ヒトラーを生んだ国』新潮選書，東京，1986。

邦訳文献

クラウル, M.:『ドイツ・ギムナジウム200年史』(望田幸男 他訳) ミネルヴァ書房, 京都, 1986.

(Kraul, Margret: *Das deutsche Gymnasium 1780-1980*. Suhrkamp, Frankfurt a. M., 1984.)

ゲイ, P.:『ワイマール文化』(亀嶋庸一 訳) みすず書房, 東京 1970.

(Gay, Peter: *Weimar Culture. The Outsider as Insider*. Harper & Row Publishers, New York, 1968.)

ゾンバルト, N.:『男性同盟と母権制神話 — カール・シュミットとドイツの運命』(田村和彦 訳) 法政大学出版局叢書ユニベルシタス441, 東京, 1994.

(Sombart, Nicolaus: *Die deutschen Männer und ihre Feinde. Carl Schmitt — ein deutsches Schicksal zwischen Männerbund und Materiarchatsmythos*. Carl Hanser, München/Wien, 1991.)

ベンヤミン, W.:『書簡 I 1910-1928』ヴァルター・ベンヤミン著作集14. (野村 修 訳) 晶文社, 東京, 1975.

(Benjamin, Walter: *Briefe*. Band 1, Frankfurt a.M., 1966)

ラカー, W.:『ドイツ青年運動 — ワンダーフォーゲルからナチズムへ —』(西村 稔 訳) 人文書院, 京都, 1985.

(Laquer, Walter Z.: *Young Germany. A History of the German Youth Movement*. Routledge & Kegan Paul, London, 1962.)